

緩和ケアと音楽療法

たたらリハビリテーション病院の緩和ケア病棟では、2009年から週に1回音楽療法が導入されています。「音楽療法」と言葉にすると少し硬い印象かもしれませんが、自由に楽しみながらご参加いただける院内活動です。病棟ホールでは、午後40分ほど音楽の時間があり、病室から耳を傾けることもできます。患者さんだけでなく、ご家族、スタッフが歌ったり、時には民謡で盛り上がり踊りだしたり、古い曲をしみじみと懐かしんだり、思いが込み上げて涙される人がいたり。

音楽を通して患者さん同士も顔を合わせてお互いを知り、時にはご家族で様々な想いを分かち合うような場にもなっています。主にオートハープという楽器を持って、個別に病室訪問をする時間もあります。音楽や楽器を積極的に楽しむだけでなく、リラクゼーションを目的とするなど、いろいろな関わり方があります。

患者さんがご希望される曲は、童謡や唱歌、クラシック、昭和の歌謡曲、フォークソング、ジャズ、民謡、などさまざまです。時には、3代目J-Soul Brothers やデヴィッド・ボウイなどの洋楽や最近のポップスをリクエストされることもあります。

先日、ある患者さんが音楽について、「不思議だよ、昔聞いた曲が耳に入るとなんだかわくわくしちゃって。その頃の自分に戻るんだよね。タイムマシンみたいに」と話されていました。タイムマシン…確かにそうかもしれません。

戦争中の厳しい時代を過ごしたある方は、その時をともに過ごした仲間と歌った曲をリクエストされ、音楽が始まると「胸が震えるようです」と涙しながら、力強く一緒に歌われました。この方のように音楽を頼りに思い出巡りをされる方は少なくありません。ある方は、ある曲を聴いて「初めて親元を離れて就職し、期待と不安で胸がいっぱいだった」ことを思い出し、ある方は、「大好きなお父さんと過ごした夏の日」のことを思い出されました。そうした経験は、一緒に手をつないでその方の人生の一場面を見に行くような、私にとっても不思議な時間でした。

音楽との関わり方から、その人自身の生き方そのものを教えられることもあります。ある女性とは毎週ピアノで連弾をしていましたが、「この曲は初心に戻ります」と、最後には必ずアンナ・マグダレーナ・バッハのためのメヌエットを弾くのです。病気が進行し、ピアノの所まで移動することが難しい状況でも、彼女は頑張ってピアノに向き合いました。翌週病室にて、「今日はピアノ弾けません。でも先週弾けてよかった」と言葉にされ、その夕刻に旅立たれました。患者さんの思い出の音楽、それは人生の大切な1ページを教えて頂いているように思われます。

音楽療法士:梅崎聡子

2015年11月より師長が交替しました

ご挨拶

緩和ケア病棟の新師長に就任して

緩和ケア病棟 新師長 / 益田明美

約19年間、訪問看護に携わり、今回初めて緩和ケア病棟にやって参りました。これまでも終末期の患者さんの在宅ケアや緩和ケアを担当することもあり、引き受けることにいたしました。異動するまでは、緩和ケア病棟について「最後までの日々を穏やかに過ごすところ」というイメージを持っていました。というのも私が実際に関わった多くの患者さんは、できるだけ家で過ごし、いよいよになってからの入院を選択されていたからです。

しかし、7階病棟には、ご本人の想いやご家族との関わりを何より大切に、記念日と一緒に祝い、一瞬一瞬を大切にされた笑顔の写真がありました。リハビリで身体機能の向上を目指し、臨床心理士や音楽療法士も含めた心のケアを行い、苦痛に対しては的確に薬剤を使い、**その人らしく一日一日を大切に過ごす**ことができるように多職種が協力してしっかりとケアを行う体制があります。

瀬川前師長の後を引き継いで、緩和ケア病棟の師長という大任が務まるか不安がありますが、今後の患者さんやご家族、そして職員との関わりを通して、あらためて**「緩和ケア」を学んでいきたい**と思います。



(左)前師長 瀬川恵子 / (右)新師長 益田明美

緩和ケア病棟の師長として過ごした日々

緩和ケア病棟 前師長 / 瀬川恵子

緩和ケア病棟での5年半の日々を終え、離れた今だからこそ思うことがあります。

イメージが覆えされた緩和ケアの現場

異動したばかりの頃は、最期の時を過ごす場面では苦悩が多く、患者さんやご家族、関わるスタッフも辛いことが多いだろうと想像していました。もちろん時には厳しい局面もありますが、7階でエレベーターを降りると、訪れる人にスタッフの笑顔と「こんにちは」の言葉が注がれ、温かく優しい空気が流れます。**患者さんやご家族から「ここに来て皆さんに会うとほっとします」と言う言葉をいただく**ことも。

季節の行事、誕生会などのイベント、たっぷりのお湯にゆっくり浸かったり、できる限りトイレに行きたいというご希望への対応、住み慣れたご自宅への外出など、その瞬間を大切にします。

人がひとを看るということ

7階病棟のスタッフは医師も看護師もみな一様に、患者さんやその家族の背景や人生を**「耳と心で聴く」尊敬の気持ち**を持って見守っています。そこには、ケアをする、されるという直線的なつながりではなく、螺旋状の“ケアリング”が存在します。

お看送りの時は、スタッフがデッキで育てたお花を小さなブーケにして手向けます。ご家族と一緒に故人を囲み、想いを馳せながらお別れをします。**「最期まで優しくしてくれて、丁寧に触ってくれて、本当にありがとう」と言葉**をいただくことも少なくありません。時に故人が好きだった歌を歌い、みんなでご家族が視界から消えるまで見つめ、ご冥福を祈ります。



縁あって…

あるスタッフが「私は受け持ち看護師だったのに十分なケアができなかった」と言ったことがありました。「そうなの？でも私は見ていたよ。あなたがそっと患者さんの持ち物を整えたり、温度や風にまで気を使っていたこと。安全に気を配ってそっとカーテンの間から見守っていたこと。だから患者さんは笑顔で過ごせたんだと思うよ」。私も彼女とともに涙しました。

私が自慢できることといえば、遺族会に**“陽だまりの会”**と名前をつけたことかもしれません。この5年半は**「一期一会」を実感できるかけがえのない時間**でした。看護師であっても自然に込み上げる感情を押さえることができない時は心を解放してもいいのだと思えました。緩和ケア病棟でのかけがえのない日々を私は決して忘れません。